



元祿泰平記大石内蔵介八切

☆八切止夫の既刊好評書・(各八八〇円)☆

幕末おんな唄

歴史の蔭に咲き散って
ゆく幕末女性史悲歌

大英雄 織田信長

尾張・美濃・伊勢と次
々と奪ってゆく三国志

戦国仕留人

北条早雲・長曾我部元親
明智光秀ら仕留三人衆

欣求浄土

日本人はすぐ騒ぎ忘
れるが水銀被害は増大!

乱世仕置人

戦国英雄伝の道三や光
秀らのイラスト30入!

望郷(明治女性史)

海外へ出てゆく女たち
の哀れな実話!

元禄泰平記 〈大石内蔵介〉 著 者 八切止夫

1975年 2月25日 印刷

1975年 3月1日 第一刷 発行者 矢留 的

印刷 日本製版KK 製本 ニッセイバインダリーKK

発行所 東京都中央区日本橋堀込町2-20 日本シェル出版
日本シェルトー(株)内

☎ 664・5040 668・1974 666・9912

振替 東京 112231 千 103



元祿泰平記大石内蔵介八切

目 次



岩田専太郎画伯・連載中挿画

鉄砲州掠奪騒ぎ……………	セ
刃傷の真相は何か……………	二
柳沢吉保の時代……………	三
山者の大野九郎兵衛……………	五
文臣二番手組……………	六
天野屋利兵衛は男でござる……………	七
討入り十二月五日……………	九
武臣派の立場……………	一〇
新地心中の女……………	一八
雪のふる朝……………	二〇
片岡源吾の女……………	二七

刺客清水一学……………	一四
生き急ぎ死に急ぎ……………	一五
日本橋石町……………	一七
紀伊國屋文左衛門……………	一八
泉水の錦鯉……………	一七
松前伊豆守の悲願……………	二〇
あわれ大石主税……………	二三
本所林町五丁目……………	二六
討入りは十五名のみ……………	二三
切腹だったのか……………	二四〇
大石良雄年譜……………	二五
討入佩刀覚書道具帖……………	二五

装・中
州
ざ
ざ



岩田専太郎画伯・連載挿画

鐵砲州掠奪騒ぎ

九ツ半（午後一時）に、時計の間へ奥州一の関三万石の田村右京大夫はよび出された。

老中より命令をうけ家臣に仕度させ、八ツ半（午後三時）に、異例だが桜田門下馬口から、

「内匠頭受取りの駕」を入れさせ、中ノ口から右の内廊下までそのまま担ぎこみ、坊主部屋の前
衝立のところで引き渡されたのを、駕に押しこめ、すぐ施錠し網をかぶせた。

邸へ戻ってきたのは、もう午後四時なのに、同行してきた上使庄田下総守が、

「理不尽にも刃傷に及んだる儀は不届につき、切腹を申しつくる」と沙汰を出した。

田村家では一城の領主ゆえ邸内で切腹するよう、白紙ばりの板囲いした居間を設けたが、

「早うに済ますがよい」と庭先に薙をしき、そこへ聲を一枚もってこさせて駕の戸をあけた。

「今生の名残りに、酒を一杯」と所望されたが、「大法でござる」と庄田下総守は断わった。

「では、煙草を一服だけ」懇望してきたが、「……火気は厳禁でござる」と拒絶してのけた。

恰好がつかないように内匠頭が、眼をふせて低く、

「では、茶を……」と口にしたので、目付として付き随ってきた多門伝八郎が、

「只今すぐに」と、田村の家臣に運ばせた。が、呑み終るのも待ちかねたように、

「早うに……」と介錯人をせかしたという。が、ここで「多門伝八郎筆記」なるものには、

「内匠頭は硯箱を引きよせ、墨をゆるゆるすり、八風さそう花よりも、なお我はまた春の名残りをいかにせん」と、辞世の句を丁寧にしたため、これは御徒目付水野が受取り田村右京大夫へ差出した」とある。が、元禄武鑑の中に、この御徒目付の名は実存せず、また、

「田村家記録」にもこの辞世のことはない。それゆえ識者の間では、この多門伝八郎筆記は後年の偽書で、有名な辞世も、芝居の忠臣蔵が評判になってから作られたものらしいとされている。

なにしろ午後四時に駕でつれこまれ、判決の読み渡しがあつて、駕から出された途端、

「切腹」という名の死刑が執行されている。超スピードすぎる慌しさであるから、

(ゆるゆる墨をすつて丁寧な辞世をしたためる暇) などなかったとみるが正しかろう。酒とか煙草を求めたというのも作り話で、網をとり駕をあげ首をだした処をバツサリやったようである。

さて、何故に、こんなにも殺すのを急いだのかとなると、これまでの俗説は、

「赤穂義人録」二巻をだした室鳩巢のごとく、浅野内匠頭が偏狭な性質で他に好かれず、そのために即、死罪の判決が評定の結果でたのである、といった意見が圧倒的である。

「朝廷に対し奉って恐れ多い」と、將軍綱吉が激怒して、即決で死罪にしたとの説も明治以降にはある。が、この説も不自然である。

なにしろ当日は將軍綱吉も夕方まで勅使や院使と同席で、觀世の結城座や宝生流の外山座らの

能狂言を、灯がともす頃まで同席でみていたのである。判決などは誰もしていない。

また評定をしたというが、老中阿部豊前守や土屋相模守、秋元但馬守は、馳走接待役の後任を下総佐倉七万石の戸田能登守へ命じ、すぐ取って返し黒書院において將軍綱吉に陪席し、狂言拝觀の取持ち役をしている。勅使や院使を放りだして集って評定などしておられる騒ぎではない。

では誰が將軍や他の老中にも相談せずに、

「即、死罪」とスピードに決めたのかといえば、云わずと知れた柳沢弥太郎吉保である。

(いよいよ明日限りゆえ、なんとしてでも仏法護持の大詔をだして頂くようにせねば……)

と、前日、最後の機会を逃がすまいとして吉良上野介を呼んで、嚴重に申しつけようとしたところ茶坊主が、上野介が見つからず饗応役の内匠頭を代わりに連れてきた。そこで人違いであると退らせようとしたが、癪にさわっていたので吉保は、

(内密なことであるが上野介は、神信心の徒へ禁圧の勅命を最後の饗応の明日、將軍家へ伝えるよう画策しているが聞いているかや)

と浅野弾正以来神道派の旗頭の浅野の一門と承知の上で、故意にたたきつけるようにいった。饗場塩が割安な赤穂塩にくわれ市場を失った吉良上野介とは、どうやら、不仲らしいと見当をつけて口にしたのである。

が、せいぜい若い内匠頭が年輩の上野介へ、へらず口をたたくか多少の意地悪をするぐらい

に、吉保としてはたかをくくっていたのかも知れぬ。それゆえ、

(まさか……そこまでするとは、刃傷沙汰に及ぶとは……)

と、知らせをきいた時には、さすがの柳沢吉保も狼狽したのかも知れない。

そして、もし内匠頭が刃傷の理由をきかれでもして、

「柳沢さまのお口より上野介めが、大詔を頂くよう画策している旨を教えて頂き、神徒全体のため食い止めんと欲して」とでも洩そうものなら、これは事である。そこですぐ吉保は、

「何も他へ口外せぬよう外から見張りをつけ、一人で坊主部屋へとじこめ、田村の屋敷が近くにあるゆえ、すぐ仕度して家来に迎えにくるよう云いつけてある。よって構わぬから駕を城中へ入れさせ、内匠頭をすぐ移して施錠し早々に城外へ出してしまえ」

と腹心の庄田下総守安利に命じ、急ぎ取り計らせたが、それでも気になるから、

「余人に取り調べさせるはまずい、厄介ついでに田村邸へおもむき、有無をいわせずに首にしてしまふがよい」と、またいいつけた。事情が呑みこめぬまま庄田下総守は、

(浅野さまはかねて柳沢さまに憎まれていなさる……のか)

と考え、ここで柳沢吉保の気に入るようにしておけば、自分の出世の早道になろうと、「せっかく、板ばり白紙貼りの部屋を急ぎ作りましたゆえ」と、田村邸ではいふけれど、「かまわぬ。庭をだし庭先で始末せい」早くかたをつけようと無慈悲に命じたのである。

夕方になって片岡源五右衛門や磯貝十郎左衛門が、遺体をひきとりにゆくと田村家では、

「このたびの吉良上野介とのことは、前もって家来どもへも知らせるべきであつたらうが、なにしろその余裕がなく、本日のことは、まことに切羽詰つたやむを得ぬ事で、さだめしみな不意のことゆえ不審に思ふであらうが……との口上で、御遺言をしかとお伝えします」

とは本当か嘘かいつてくれた。が、あまりにも手厳しい庄田下総守の扱いが、どうにも柳沢吉保の指図なりとは知れていたゆえ、後難を怖れてか、

「御遺体の引き渡しは御親類さまと云われておりますので、明朝にも芸州広島の御本家さまか三次の御分家の衆とでも御同道の上で……」と、あくまで拒んだ。が、磯貝十郎左衛門は、

「もれうけたまわれれば主人内匠頭は、お庭の駕の中で最期をとげ、そのままになつてゐるとか……もし御渡しなく、このまま夜露にうたせつ放して明朝まで待てと仰せあるなら、数ならぬ身を慈しんで下さつた殿のお供をするため、この十郎左もここで追腹をきります。どうぞ、お情けあらば共に夜露にうたせて下され……ませ」と、女にも滅多にいないような端麗な顔を硬らせ、白い胸許をおしひろげ艶やかな腹部まで出して、脇差を今にも突き立てんとした。

「あいや、そこまでなされましては、当田村家がまこと迷惑します。明朝お渡しということに、受取りの日付けは書きなされ早々にお持ち帰りあれ」と、庭にくるまつた首のない駕から出してきた遺体を渡されると、

「殿ッ、吾らにござりまする」と片岡源五右衛門も、さながら生きている浅野内匠頭に対するごとく、恭々しく抱きかかえて泣き伏した。このとき用人槽谷勘左衛門が浅野家を代表し受取り証文をかいていったと、これだけは、田村家記録文書にもある。

この後で槽谷と建部喜六は、遺体を引取った報告に鉄砲州の屋敷へおもむき、磯貝や片岡は田中貞四郎や中村清右衛門らと共に、遺骸を泉岳寺まで運んでいったが、そこで四人は髪もとの髻もとをきって、死出のお供とした。

翌三月十五日になると、目付の天野伝四郎、近藤平八が、御徒目付二名を伴ってきて、

「お屋敷の端々まで取り乱さぬよう、火の元はこの外に念を入れて用心するよう」

江戸家老安井彦右衛門、槽谷勘左衛門の両名へ云い渡し、鉄砲州屋敷内をみて廻って戻った。

次の十六日、事を荒立てぬようとの配慮か、親類の美濃大垣城主戸田采女正と、旗本三千石浅野美濃守の両名が、屋敷の明け渡しを伝えにきた。阿久利は取り乱さずかしてまっつて、

「承知しました……」と挨拶して、すぐさま、「亡き殿のお名前を恥かしめぬよう……」

かいがいしく屋敷の中の什器や調度道具類を、涙ひとつ出さずに指図して荷作りさせた。

そして翌十七日になって、広島の浅野本家より、

「御屋敷受け取りに参りました」と、人数が表門より入ってくると、阿久利は、

「しばらく……」と、亡夫内匠頭の居間に入り、

「……てまえの生涯も、今日ここまでにて、もはや終りをつげさせて頂きまする」

仏教偏重の世にはさからえず、やむなく泉岳寺を壇那寺にはしているが、神棚しか祀っていない神道派の屋敷ゆえ、白布をまん中に敷いて北向きに端座した阿久利は、侍女の松枝をよんで、

「……髪を、早うに」と、惜し気もなく黒髪をきらせ、二つに分けて包ませ、

「ひとつは、この神棚へあげてゆくのだじゃ」夫の靈に柏手かしこをうってから切り火をきった。

が、引き移りのため表門は遠慮し裏門から外へ出たものの、これで見納めかと、

「表門の見える方から行つてくりや……」駕の中から名残り惜しそうに声をかけた。が、表へ廻ると、町家の者や職人ていのが、

（どうせ、お取上げになる屋敷だ……）と、いうのであろうか。制止する広島足輕あしかりというもの事をきかず、雪崩をうって、

「わっしょい、わっしょい」と長屋へ入りこんで、たちのいた家来共が残していった古火鉢や破れ屏風から、焼け焦げのついた畳まで持ち出していた。そして女子供は、薪木にするつもりか、羽目板まで石で叩きこわし運んでいるところだった。

「……まあ」さすが気丈夫な阿久利も、掠奪騒ぎには堪えかね駕の中から涙声を洩した。

しかし駕が本所の方へ遠ざかっていった頃。かけつけてきた紀伊國屋文左衛門は驚き、

「……浅野の殿さまがためえらのために、人柱に立って下されたのも判らんと太いやつらだ」

伴ってきた文太らに、六尺棒をもった番太や四郎兵衛配下の者を集めさせ追い散らした。

「家中一同のもの、みな、お揃いめされたるか」

総登城のふれ太鼓が、まだ聞える中で大石内蔵介は、廊下まで溢れた顔をずらり見渡した。御役にある者は隔日に登城しているが、半数以上の無役は年賀と八月一日の八朔はっしゅく、年に二度しか城の大手門はくぐれぬ。まして天守閣まで上れるのは、大半の者には生涯に一度あるかなしかのことである。

そのせいか辺りをきよきよと、伸び上って眺め廻している者もいた。内蔵介は息をのみ、「早水藤左衛門と菅野三平が火急の知らせで到着……よって集まって貰ったのだ」と告げ、「只今のところでは……殿さまが千代田城の大廊下で吉良上野介どのへ、お斬りつけなされたるよしを、御目付鈴木源五右衛門さまが江戸家安井彦右衛門、藤井又左衛門の両名へ告げられたことしか、まだ判っていないが、とり急ぎ知らせしておく」と暗然とし、

「が、殿の御舍弟しやてい浅野大学さまより、札座の儀をすぐ手を打つようとの、御添書があったゆえ、これまで無役であった者でも算勘できる者や、文字の有る書ける者は金奉行、札座奉行、勘定方の手伝いを今からなすよう、申しつけおく」といい渡した。

領内だけで流通させてある藩札を、至急回収の準備にかかれと、命令された通りに伝えた。

「はあッ……」参集した家臣一同も、みな顔色を失い茫然としながら退出していった。

殿が何故に刃傷なされたか、その訳も判らず、事の成行きも不明だが、幕閣の意向が藩札の引き換えの用意をというなら、神妙に従ったほうが殿の御為ならんと内蔵介は判断したのである。

だから出してある銀札に対して城中の金銀が、七割ぐらいしかないことやがて計算ができると、「ご本家さまへ、借金の御願いに行くがよい」と十九日に番頭外村源左衛門を使いにだした。

「殿のお指図なくば無理な御相談にて候」と広島城の勘定方沖権太夫は、依頼の話にのってくれなかったので、阿久利の方のお里方である三次へいって口添えを頼んだが、土佐守も、

「御本家は江戸表ゆえ、伺いをたてるよう、わしからも話しはしてやろう」としかいってくれなかったと戻ってきた。ところが、二十二日になると原惣右衛門と大石瀬左衛門の両名が早打ちの使者として、ついで赤穂へ到着した。

「えッ、殿さまはその日の内に、もはや御切腹の処分とな……」

武臣派の岡林奎助や玉虫七郎右は、あまりの沙汰に立腹してしまい、大石内蔵介の許へ、「今さら江戸表の意向に阿諛するとき振舞などよさっしやれ、武骨者の外村源左衛門をして借銀の使者にたてても、一文も借りられぬは当然のこと……」と強談判にきた。

「もしもの事が殿の御身にあつてはと、借りてきても藩札の引き換えをとわれらも考え外村を御番組頭の中より出しはしたが、かくなる上は城の銀はみな軍費にあてるべし。もともと紙切れの